

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ある造園家がいった。「現代の造園に灯籠や蹲などは不必要なものである。よろしくとりさるべきだ」

ある作庭家がいった。「灯籠と蹲がなければ日本の、すくなくとも茶室の庭とはいえない。それをどこにおくか、ということから庭づくりははじまる」

この正反対の意見をどうかんがえたらいいのか？
たしかに「灯籠や蹲！」といったとたん、その庭は古くさく感じられる。「おじいちゃん趣味？」などとききかえされそうだ。だいいちこのごろのわかい人は、灯籠はともかく蹲などというものはイメージできまい。

まず灯籠は、そのもちいられる材料に竹、木、金、石などいろいろあるが、茶庭ではもっぱら石灯籠である。その外見は一本の石の柱の上にのった石の屋根のある火箱だ。夜になると灯がともる。

これを証明器具といってしまえばもちろんそういう働きはある。「社寺への献灯として発生した」からだ。

しかし古代日本人の火にたいする想いからすると、これはオリピックとどうようの「聖火」ではなかったか？ つまり神さまにささげる神聖な火だ。たとえば奈良の東大寺の大仏殿の正面には一本の銅製の大きな灯籠がドーンとたっているが、それは照明というより大仏にささげられた火である。おなじく当麻寺の金堂のまえにもわが国最古の石灯籠がある。

その石灯籠を茶室にもつてきたのは千利休とされる。利休がたまたま京都の郊外の古いヤシロ

かなにかの灯籠をみて「おもしろい」といって茶庭につかうようになったのが起源だ、という。ということは、それまでの庭には灯籠などなかったのだ。

なぜか？ それまで庭はもっぱら昼につかわれたからだ。したがって灯火の必要などなかった。いっぽう茶の湯は夕刻から夜にかけておこなわれることがおおかった。すると茶庭では夜の景が大切になる。

また蹲は、神社にまいったとき手をあらい口をすすぐ手水舎とおなじだ。神さまにまいるとき身体をきよめるように、茶事をはじめるときにも茶人は水で心身をきよめた。

①とすると茶事は「神事」か、禅宗からおきたのだから「仏事」か、ということになる。

A、茶事がなぜ仏事なのだろう？

そこで茶についてかんがえよう。

茶はツバキ科の常緑低木で、原産は中国南部の雲南省などの山岳地帯いわゆる照葉樹林地帯とされる。その茶の木の新芽・若葉をつんで乾燥させ熱湯をかけてのむ。

B 若芽・若葉を発酵させて乾燥させるのが紅茶、蒸気などでむして発酵をふせいでから乾燥させるのが日本茶、その中間がウーロン茶だ。その違いは茶の木の違いというより製法の違いであり、製法の違いは文化の違いである。ストックされたものをこのむか、生ものをこのむかだ。

さて茶の原産を照葉樹林地帯だとすると、いまから五〇〇〇年ほどまえの地球の温暖期にワラビ、コンニャク、ヤマノイモ、シソ、ウルシなどともに日本にやってきた可能性がある。しかしじっさいに飲茶の歴史があきらかなのは中国だ。漢末（三世紀）のころ江南地方を平定した中国人がその地の飲茶の風をもちかえって医薬品としてもちいた。唐の時代には上流階級や僧のあ

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

十月になった。父の帰宅がすこしずつ遅くなっている。週のうち何日かは、祖母が昼のあいだに訪れて、布団を日に干し、保存のきくおかずを作りおきしてくれる。音和はそれのおかずをあたため、炊飯器で保温されているご飯をよそって、ひとりで食べた。今夜は、炊きこみご飯だった。

午後八時を過ぎて、両手に重たげな袋をさげた父が帰宅した。音和は、茶碗と箸を食卓にならべたが、父はあとにすると云い、手さげ袋から印刷物をとりだして、一枚ずつ折りたたむ作業をはじめた。伯父のフォトスタジオの宣伝チラシだった。藤倉しのぶが持ち帰ったのとは、すこしデザインがちがう。

音和は父にかまわず風呂にはいったが、出てきたときも父はまだチラシを折っていた。彼が風呂あがりに食べるつもりで切りわけておいた梨をつまんでいる。音和は麦茶をついで、父のまえにおいた。そのうち、ふたたび立ちあがった父は、コートをはおった。

「でかけるの？」

「ああ、まだ仕事のこつてるんだ。遅くなるかもしれないから、先に寝てろ。」

父はそう云って、袋をさげて玄関からでていった。音和には父の仕事がなにかの察しがついた。窓からのぞいた音和は、父が自転車の前かごに手さげ袋をいれて、でかけてゆくのを目にした。

アパートは大家の家があるのとおなじ敷地に建っている。一階は倉庫で、二階に三室あったが、ほかの二室は空き部屋で、住んでいるのは音和と父だけだった。建てかえの予定があつて貸すのをやめていたところを、期限つきで安く借りたのだ。

大家の家の台所の窓が、アパートのほうを向いている。テレビの天気情報の音声だけが聞こえ

てくる。降水確率は四十パーセントだと云う。今夜、寒冷前線が東京の上空を通過するのだ。音和は傘をつかんで、アパートの階段をかけおりたが、父はもう走りさったあとだった。追いかけてくても、音和は自分の自転車を持っていなかった。

父がでかけてしばらくのち、湿った風が吹きはじめた。音和は窓をしめながら、学校のある台地の上空に、重々しく雲がたれこめているのを目にした。厚い雲のなかがときおり閃くのは、そこに雷雲があるからだった。

部屋のなかには、まだ手さげ袋がひとつのこっていた。印刷所から配達されたままのクラフト紙につつまれた束がはいっている。音和はそのなかからひと束をとりだしてほどこき、父がしていたように、投げこみサイズに折りたたんだ。やはり、以前に目にしたものとはちがう仕様だ。

記念写真の特製のフレーム仕上げにするサービスつき、と書いてある。赤ん坊の写真ならばスワンやカナリアなどの鳥トリボンをあしらったもの、七五三の写真には、金や銀の縁かざりのついた胡蝶やクジャクのもようがつく。古風にかたよらず子どもじみてもいない絵柄が選ばれ、それなりに洗練されているのは、音和にとって意外だった。

彼もまた、伯父の商売の俗っぽさをひそかに批判していたのだが、本館のほかにスタジオを新しくかまえるほど繁盛しているということは、それなりに人の心をつかんでいるのだ。おかげで父も、失業を免れた。

近隣の家で雨戸をたてる音がひびく。雨がふりだしたのだ。まもなく、激しい雨音に変わった。音和は父の自転車がもどつてこないかと耳をそばだてたが、雨音にかき消されてなにも聞こえない。

三百メートルほどさきの神社の参道入り口に、自動販売機といっしょに公衆電話がある。音和

はそれを思いだした。午後九時半をまわったばかりだったが、隣接する大家の家はすでにひっそりとして、電話をかけてほしいと云うのは気がひけた。音和は公衆電話を目ざして、雨のなかを走りだした。急ぐために、傘はささず手にしたまま走った。

家をでたときは、河井に電話をかけるつもりでいた。だが、泣きごとを云うために番号を聞きだしたのではない。背なかを雨にうたれるうち、音和はなにかもつと強い自分でありたいと思いはじめた。強情で生意気な点では自覚のある音和だったが、それはたとえば厚く積もった堆積物たいせきのようなもので、いくらでも流動する。それらがぜんぶとりのぞかれたときに、のこるものが強くなければ意味がない。

夜だろうと雨だろうと、飲まず食わずで巢を目ざすという鳩のことが思いだされた。休めば危険がまず彼らにとって、翔びつづけることが身を守るもつとも有効な手段でもあるのだ。感情的なふるまいなど、はいりこむ余地がないほどきびしい現実^②に立ちむかっている。

音和は、やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだした。神社の参道前へさしかかったとき、前方に自転車のライトが見えた。街灯がそのあたりを照らしている。だから、たがいに相手がだれかをみとめた。

「……どこへいく？」

雨にぬれた父の姿は、音和に梅雨の晩のことを思いださせた。ただ、今の父には崖っぷちを歩いているような気配はなかった。ひらきなおったようすで、なかば平然と雨にぬれそぼっている。

「伯父さんに電話しようと思って、」

音和は気負いながらそう云った。河井に泣きごとを云わないときめたあとで、彼が決心したのは、伯父に直接抗議することだった。

「なんの用で？」

「だって、こんなのはフェアじゃない。おとうさんは、もつとまともな仕事ができるのに、それをさせないのはまちがっている。駅まえでのチラシ配りや、郵便受けへの投げこみなら、ぼくにもできる。……だから、ぼくがやると云おうとしたんだ。おとうさんには、ちゃんとした仕事をさせてほしい。」

伯父に電話をしようとしたときの音和は、父への不当なあつかいに抗議することしか考えていなかった。自分にも何かができるとは、思っていなかった。雨にぬれながらも、音和をまっすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ。

父は笑みを浮かべた。それを見て、音和の緊張がゆるんだ。こらえていた思いが涙になる。いつのまにか傘を持つ手をおろしていた音和は、ふたたび雨にぬれていた。雨脚あまあしがはげしくなる。

だが、その雨は A。

音和の手から傘をとった父は、それを息子にさしかけた。自転車の前かごの手さげ袋は、すっかり雨にぬれている。簡単な防水加工をしてあるが、雨はそれ以上にふっていた。

「それ、ぬらしたらまずいんじゃない？」

音和は手のひらでほほを拭ぬぐいながら父にたずねた。

「たぶん……」

父は笑顔でこたえ、帰ろうと音和をうながした。ふたりは雨のなかをアパートへもどり、ゆずりあったあぐく音和が先に二度目のシャワーをあびに浴室へはいった。彼につづいて父がはいり、ようやく遅い食卓についた。まだ十一時にはならない。だが、この時間、大家宅は寝静まって、気配もなかった。雨音が弱まると、とたんに虫の鳴く声が出た。

音和は、先ほど折りかけていたチラシを放りだしたままなのに気づき、あわてて片づけた。こっそり手つたおうとしていたのに、きまりが悪かった。

「心配をかけて、すまなかった。でも、私は平気だから。おまえもよけいなことで気をもまなくていい。自分のことに集中してろ。これでも、おまえが思っているよりはずっとタフなんだよ。とくに、伯父さんにたいしては。」

いつもの父の意地がでる。

「そういう態度だから反感を買うんじゃないの？」

「おとなしく頭をさげれば、よけいにたたかれるだけさ。……子どものころから、そういう兄だった。」

「憎しみあつてるの？」

父は小さく笑い声をたてた。
「ただの兄弟ゲンカだよ。いまは借金があるから、ほんとうのケンカはそれを返してからだ。そう思って辛抱^{しんぼう}してる。それに、いつまでも兄の世話にはならないさ。」

音和はようやく、自分が考えるほど父はこのチラシ配りを深刻に受けとめていないのだと安堵^{あんど}した。

「可愛げのない弟だね。」

「おたがいさまだ。六歳ちがいの弟に、バスでも新幹線でも飛行機でも、窓側の席を一度もゆずったことのない兄だよ。われわれの亡き父親は、……音和が好きだったおじいちゃんは、兄にも私にも小学生のときからひとつずつカメラを持たせてくれた。だが、旅行先からもどってフィルムを現像にだすと、私のはきまつて感光していて、プリントができないんだ。寝ているあいだに、

兄がカメラの裏布たをあけるんだよ。証拠はなかったが、ほかに理由は考えられない。そういう兄と、どうして仲良くなれると思う？」

「それもゆがんだ愛情表現なのかも。」

「わかったふうな口をきくなよ。その手の知らなくてもいい俗な云い草を、いったいどこから仕入れてくるんだ？」

おとうさんの書棚にあったミステリー、とは答えず、音和はべつのことを口にした。

「ぼくにもきょうだいがいれば、おとうさんの気持ちも、もうすこしわかったと思うけど。」

「……もし弟か妹がいて、彼か彼女がおかあさんと暮らしたいと云ったら、おまえも向こうへいったんだろうな。」

「そのほうがよかった？」

「私が訊^きいているんだよ。父親の仕事が自分の生活圏でのチラシ配りだなんて、がっかりだろう？」

「……ぼくは、」

④ この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられる。自分たちの都合だけで離婚話を持ち出した両親に腹をたて、意地をはって、好きでもない父といっしょに暮らすのだと思ひもしたし、態度にもあらわした音和だったが、かつてのせいたくさのかけらもないいまの暮らしが、さほど苦にならないのは、身近になった父が、ありのままの姿を示してくれるからだだった。

「……いまのおとうさんのほうが……好きだから。かつこうつけているときより、ずっといいよ。」

父は箸をおき、ありがとう、と頭をさげた。そのとたん、音和の目に涙があふれた。父はタオルをさしだした。

「チラシ配りは、私が志願してはじめたことなんだよ。サービスでつけているフレームのデザイン

ンを変えたほうがいいと提案したら、伯父さんはサービスなんだからデザインに凝る必要はないと云いつつも、企画は承認してくれた。そのかわり、効果があがったとはつきり数字に出ないときは、新しいフレームとチラシの製作費を給料からさしひくと云われた。」

「筋は通ってるね、」

父は軽快な笑い声をたてた。「なまいき云ってないで、もう寝ろ。」

音和はたたみの部屋に布団を敷いた。昼のあいだに祖母がきて、日にあてておいてくれた布団は、まだ温かさがのこっていた。音和はほほをあてながら、声はずませて父をよんだ。

「おとうさん、この布団、ひなたの匂いがするんだよ。」

「……それが、うれしいのか？」

「うん、うれしい。すぐ気持ちがいい。」

「もつとはやく知れたかったよ。おまえをよろこばせるのが、そんなに安あがりなことだったとはね。」

「ぼくも、ひなたの匂いがこんなにいいものだなんて思わなかった。」

音和は、しばらく布団にうつぶせていた。彼が^⑤味わっていたのは、ひなたの匂いばかりではなかった。

いつしよに味わった。

（長野まゆみ『野川』による）

問一 線部①音和には父の仕事がなにかの察しがついたとありますが、「父の仕事」を文章中から二つ抜き出さない。

問二 線部②音和は、やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだしたとありますが、どのような気持ちの変化があったからですか。変化前の気持ちと変化後の気持ちがわかるように答えなさい。

問三 線部③「伯父さんに電話しようと思って、」とありますが、「音和」はどのようなことを電話で言おうとしていたのですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おとうさんが雨にぬれながら仕事をするなんて、体調が悪くなったらどうするんだよ。
イ おとうさんは、もつとまともな仕事ができるんだ。ちゃんとした仕事をさせてよ。
ウ おとうさんは毎日遅くまで働いているんだ。もつと早く帰られる仕事にしてよ。
エ おとうさんの企画はとてもすばらしいんだ。もつとデザインを凝ったものにしてよ。

問四 空欄 A に入る最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さみしかった
イ かなしかった
ウ ここちよかった
エ たのしかった

問五 線部④この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられるとありますが、なぜそのように答えられるようになったのですか。文章中から抜き出しなさい。

問六 この文章は、登場人物の心情を表すための特徴的な表現がいくつかあります。その一つとして、「音和」の気持ちを「こらえていた思いが涙になる」「音和の目に涙があふれた」のように「涙」で表しているものがあります。同じように、「父」の気持ちを表す表現を探し、漢字一字で答えなさい。

問七 線部⑤彼が味わっていたのは、ひなたの匂いばかりではなかったとありますが、「音和」が味わっていたもう一つのことを考え、最後の一文の **B** に入る文を創作しなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

浅間^{あさま}のみこそ孤高^{ここう}に厳然^{げんぜん}と暗紫色^{あんししよく}の山容^{さんよう}を守っても、ほかの山の峰々^{まさ}は、薪^{まき}にもならないような雑木^{ざもく}まで思い思いに色を変え、何か山の肌^{はだ}いちめんが、無数のチューブ^{チューブ}からしぼり出され、ありとあらゆる色絵具^{えきぐ}で盛りあがったパレット^{パレット}を連ねたように見える。色彩^{しきさい}の饗宴^{きやうえん}がながながとつづくのに較^{くら}べて、落葉^{らくえつ}はなんとあわただしいだろう。焚^たく^bにちようどよいほど持つてくるような従順^{じゆん}さは、山の風にはない。秋が更^ふけるにつれていよいよ頑固^{がんこ}に、気まぐれで、どうかしてある夜ひとあばれしてやろうとなると、明くる朝は森、林、樹という樹、枝という枝が追いはぎにあったように裸にされてしまう。わずかのお目こぼしはから松である。一直線にそそりたつ樹頭の先端^{せんぽん}に、マツチの長さもない細かい棒状の葉がひとつまみの金髪^{きんぱつ}のようにくつついている。これが秋の最後のひらめきで、いつのまにかそれもコーヒー色に焦げる時、すべてが冬に一変する。

(野上弥生子『花』による 問題作成のために、本文を一部改変したところがあります。)

- (1) 部①「色彩の……だろう。」の一文は、いくつの文節からできているか、文節の数を漢数字で答えなさい。
- (2) 部②「くつついている」の主語を抜き出しなさい。
- (3) 部a「ありとあらゆる」・b「ちようど」・c「ひらめき」の品詞名を答えなさい。

問二 次の各文の□にあてはまる植物名をそれぞれ後の【語群】から選び、ことわざを完成させなさい。また、そのことわざの意味として適切なものを、後の【意味】から選び、記号で答えなさい。

- (1) □に雪折れなし
(2) □より団子
(3) 火中の□を拾う
(4) 枯れ□も山のにぎわい
(5) とりの□は青い

【語群】

- A 芝生 B 木 C 草 D 柳 E 花 F 栗 G 芋 H 新緑

【意味】

- A 名誉や外観よりも、実際に利益があるほうがよい。
I 柔軟なものは堅いものよりかえって物事に耐える。
U 何でも他人のものは実際よりよく見える。
エ 他人の利益のために非常に危険なことに手を出すこと。
オ つまらないものでもあるほうが、ないよりはましであるということ。

問三 次の各文の 線部のひらがなを漢字に直しなさい。必要ならば、送りがなもひらがなで書きなさい。

- (1) 今日は選挙のとうひようがある。
(2) 彼はクラスの決定に異議をとなえた。
(3) 事態は思わぬ方向にてんかいした。
(4) 地震のりんじニュースが流れた。
(5) 待ち望んだ夏休みがおとずれる。

*印には記入しないでください。

受験番号	氏名
------	----



*

[illegible]

*

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七



問一	問二			問三
(1)	(1)	(3)	(5)	(1)
	語群	語群	語群	
(2)				
	意味	意味	意味	
(3)				
a				
	(4)	(2)		
	語群	語群		
b				
(5)				
	意味	意味		
c				